

半島での互いの活躍発掘

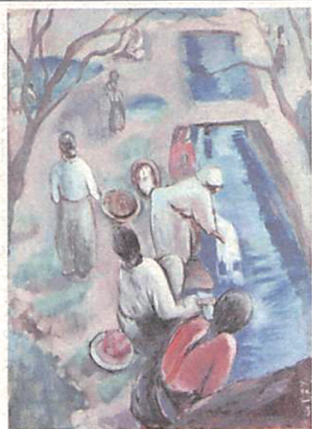
「日韓近代美術家のまなざし」展

20世紀前半、日本の統治下にあった朝鮮半島で、日韓の美術家はどんな表裏に現に取り組んだのか。画題を求めて旅した田麦儼、藤島武二らは、朝鮮美術展覧会の審判員に招かれたりした土



朝鮮時代
— せん像

加藤松林人「朝鮮時代女人像」(1920年代、紙本彩色、黄正洙コレクション蔵)



入江一子「洗濯」(1940年、油彩、カンバス、葦崎大村美術館蔵)

てきた。しかし、同時代を生きた両国の美術家の作品210余点が一堂に集するのは初めてのことだろう。神奈川県立近代美術館葉山で始まった「ふたたびの出会い 日韓近代美術家のまなざし——『朝鮮』で描く」展

冒頭で人々の暮らしぶりや名勝地などを描いた絵をずらりと並べ、実に多くの日本人画家が現地へ赴いたことをまますは伝える。韓国からの出品作はもちろん、日本の美術史が取りこぼしてきた分野だけに「発見」が多い。たとえば朝鮮半島で生ま

れたり暮らしたりした日本人画家の存在だ。加藤松林人(1898~1983年)は1918年に現在のソウルに移住した。終戦で帰国後も2国間の交流に尽くした画家だが、日本ではほぼ無名。現地になじんで暮らし、終戦後に帰国した加藤のような美術家の大半は、日本で華々しい活動ができないまま忘れられていったという。「朝鮮時代女人像」は韓国の収集家の手で守られた1916年大邱生まれの入江一子は美大入学的

ため初来日するが、戦況の悪化で故郷への思いを募らせ「帰郷」。大邱を描いた「洗濯」には異国趣味とは異なる情感が流れている。植民地という当時の時代背景を考えれば、エキゾチックな女性像に「支配/被支配」の関係性も読み取れよう。けれども「朝鮮」に向けたまなざしには多様な思いが込められていたはずだ。それらを一刀両断はしないという姿勢が同展の背骨になっている。5月8日まで。5都市を巡回する。(編集委員 窪田直子)